

原田種成著「漢文のすすめ」(新潮選書)

新潮社 1992年9月15日刊を読む

どく  
読十遍は、<sup>しや</sup>写一遍にしかず 小説家になるには

1. (1) 明治中学で親しくなった同僚に<sup>しもむらこれたか</sup>下村是隆さんがいた。
  - (2) 下村さんは<sup>あらきたかし</sup>荒木巍というペンネームで改造社の賞を得たが、純文学では生活が成り立たないから明中で貰う月給が奥さんの家計費として大切なのだといていた。下村さんは明中出身で、東京高校から東京帝大支那文学科の卒業である。
  - (3) 良い人柄の人で、真面目だから遅刻しないように始業の一時間も前に出勤してきた。小説家は夜は遅くまで書き物をしているのに朝早く起きるのは大変なことだと思った。しかし終戦後作家として十分な活躍をすることもないまま彼は間もなく亡くなった。
2. (1) 私も二十代だったから、無遠慮にこんなことを聞いたことがある。
  - (2) 大工でも左官でも<sup>かじ</sup>鍛冶屋でも、師匠を見つけ、弟子になって学ぶが、小説家になるにはどういう勉強をするのか、と。
  - (3) 下村さんは、自分が学びたいと思う作家の作品を書き写すのだ、と答えた。
3. (1) 良い話を聞いたと思った。
  - (2) それから注意していると、<sup>みなかたくまくす</sup>南方熊楠は少年時代に、読んだ本を片はしから書き写している。それが後に論文を書くときに大いに役に立ったらしい。
  - (3) <sup>ほりたつお</sup>堀辰雄は「<sup>あくたがわりゆうのすけ</sup>芥川龍之介全集」を書き写し、
  - (4) 石川達三はまだ売れなかったとき<sup>おうがい</sup>鷗外の小説を書き写し、
  - (5) 安岡章太郎は志賀直哉の小説を書き写し、

(6)小説家ではないが、今流にいえば生活美学者の花森安治はそういう他人の文章を書き写した大学ノートが百冊以上もあったという。

4. 漢文のほうにも「<sup>どく</sup>読十遍は、<sup>しゃ</sup>写一遍にしかず」十遍読むよりも一遍書き写すほうが勝っているという語がある。
5. 私は、機会があれば、この話をよく大学生にしている。小中高校の作文教育においても、書き写すことを採り入れるのはよいことだと思う。

[コメント]

暮しの手帖の編集長、花森安治さんは他人の文章を書き写し、そのノートが100冊以上あるというのには驚いた。文章修業には名作の書き写しという原田先生のお考えには大賛成。

- 2009年5月1日林明夫記 -